

---

# 緋色の雫

咲徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋色の雫

### 【コード】

N0114D

### 【作者名】

咲徒

### 【あらすじ】

流した血と涙の数だけ、哀しみがあつた。

【序章】 ～追憶と声～

「…はあ…はあ…」

鬱蒼と生い茂った木々の中、一つの大木に少女は背を預けていた。少女は腹部を右手で押さえながら荒い息遣いを続けている。白い質素なワンピースを纏った少女の腹部は赤く染まり、押さえられている手も真っ赤に染まっていた。

「…くう…っ」

足から力が抜け、苦悶の表情を浮かべる少女はズルズルとその場へあたり込んでしまう。

ダラダラとまるで壊れた蛇口のように少女の腹部からは赤い液体が流れ続けている。

それは紛れも無い、少女の血。

止めどなく流れる血はいつの間にか少女の足元に血溜りを作り出していた。

「…まさか…ね…」

少女は複雑な面持ちで呟く。

少女の腹部に刻まれた大きな傷、それは剣によって腹を突き刺された為に出来た傷だった。

いつもの少女ならばまず間違はなくこんな傷は作らない。

剣を突き立てられる前に相手の息の根を止められるからだ。

そう。

少女には『力』があった。

その『力』は圧倒的で、普通の人間ならまず太刀打ち出来ない程の大きな『力』だった。

なら少女に致命的な一撃を与えたのは普通では無い人間という事なのか？

いや、それは紛れも無く普通の人間だった。

実力的には一般の人間よりは秀でた力があった。

しかし少女に比べればそれは一般の人間と大差無いものだった。

しかし、それでも少女は不覚にもその人間によってこの腹部の傷を付けられてしまったのだ。

何故？

「…まさか…あの人がいるなんて……」

少女は苦しい表情のまま、皮肉そうに呟いた。

少女に致命傷を負わせた相手、それは少女が唯一心を許した親友だった。

いや、親友というより、少女にとっては家族、姉のような存在だった。

少女には身寄りが誰もいなかった。

さらにはその巨大な『力』のせいで、周りの人間は少女と深く関わろうとしなかった。

そんな中、唯一少女に対して優しく接してくれたのが、その親友だった。

それなのに、親友は少女を傷付けた。

何故？

どうしてこんな事になったのか？

どこで道を間違えてしまったのか？

いや、間違えてなどいない。

これは少女が自ら選んだ道なのだ、間違えている筈がない。この道を歩み始めたきっかけとなった日。あの日から、少女はその親友と真逆の道を歩む事になった。それは運命の日、そう呼べるのかもしれない。しかし少女にとってこれは運命などでは無かった。そもそも、少女は運命なんてものは信じてなどいない。これは少女の深く重い、紛れも無い自身の『意思』によって、この道を歩む事を決め、結果として少女とその親友はお互い敵同士という立場となってしまったのだ。だからこれは運命などではない。ただ、二人の歩む道が別々になってしまったただけの事。

「…まだ…残ってたんだね……」

思わず言葉が漏れる。

少女はあの日から憎悪で満たされていた。

あの日、偶然にも知ってしまった自分の事実。

それによって生まれたどす黒い感情。

その感情は少女の中で果てしない破壊衝動となり、形となった。

壊して、壊して、壊し続けた。

木々を、大地を、幾つもの命を、何もかも容赦無く壊した。

それは決して許される事ではないだろう。

しかしこの時の少女にとって、そんな事はどうでもよかった。

元より許しを乞うつもりなど毛頭無い。

ただ、込み上げて来る『怒り』という名の感情で心の中の全てを埋め尽くし、後も先も考えずに、全てを破壊する。

筈だった。

しかし少女は親友と再び出会ってしまった、戦場で。

怒りによって忘れ去ってしまったていた親友を目の前にする少女。

邂逅の最中、静かに語りかける友、少女の一瞬の躊躇、向かってく

る友、少女にとってその動きは止まって見えるようだった。

少女がその気になれば、少し『力』を振るっただけで目の前の人間など一瞬で壊せるだろう。

しかし少女は動けなかった。

そして次の瞬間、少女の腹部を白銀の刃が貫いた。

零れ落ちる鮮血。

少女は友を手に掛ける事が出来なかった。

その事に一番驚いたのは少女自身だった。

全てに絶望し、全てを壊すつもりだった。

しかし少女は友を壊せなかった。

あの時、何故動けなかったのか？

何故友を殺める事が出来なかったのか？

少女には解らなかった。

ただ、理由は解らないが、自分の中に友を手に掛ける事が出来なかった何かしらの感情がまだ残っていた事に少女は驚いた。

少女は傷付いた身体を引きずるようにして、その場から逃げ出した。友に殺されなくなかったから？

理由は解らない。

ただ、無意識の内に足が動いていた。

友は追って来なかった。

身体中の全ての力が抜けたようにその場に崩れ落ち泣いていた。

そして、その悲劇の場から去った少女、気付いた時には樹木が生い茂る深い森の中に少女はいた。

そして今、少女は逃れられないであろう死を目の前にしている。

「…なんだか…もう…疲れた…な……」

朦朧とする意識。

怒りに身を任せ、破壊を続けた少女の心は疲れ、傷付いていた。

何かを壊す度に、自分の心も傷付けていたのに、それに気付かない

まま、ただ何かを壊し続けた少女の心身も最早壊れ、崩れる寸前だった。

自分で選んだ道、後悔は無い。

しかしその道を歩むには少女の心は弱すぎたのだ。

「……………」

暗くなる視界、自らの意思に反して全く動かない身体。少女は静かに暗闇へと堕ちていった。

その時。

「……………」

誰かの

声が聞こえた。

## 【一章】出会い

夢はあまり好きじゃない。

夢自体はそんなに見る事は無いが。

でも、稀に見る夢、殆ど見る事は無い夢なのに、たまに見る夢はいつもあの頃の夢ばかり。

懐かしい。

そう思うにはあまりにも哀しい出来事が多過ぎた。

懐かしむ事も出来ない。

あの頃の記憶。

まるで鎖に繋がれた罪人のような気持ちになる。

逃げ出す事は許さない。

そう言わんばかりに、あの頃に心は縛られたままだった。

そんな日々が何年も続いた。

そして今。

『彼』の遺した言葉。

それだけを頼りに、この世界を生きて来た。

様々な町を巡り、様々な人間を見て……。

そして……。

「……………」

雲一つ無い夜の空に満月が力強く、それでもどこか儚げに輝いている。

その月の光を浴びながら、静かに吹く夜風をその身に受ける少女。ささめく静風は少女の長く美しい銀髪を舞い踊らせている。

時刻は誰もが寝静まった深夜。

町には殆ど明かりは灯っておらず、夜空に浮く満月をより一層際立たせていた。

少女がこの町に流れ着いて三日、大体の場所は見て来た。

その中でも少女が今いる場所、おそらくこの町の中で最も高い建物であろう時計台、その最上階に作られた見晴台が少女のお気に入り場所だった。

昼間は様々な人の出入りがある見晴台だが、夜中になれば誰一人としていなくなる。

この見晴台まで登る為に備え付けられた外付け階段、その手前に立てられている『夜間立入禁止』という看板のせいでもあるだろうが、時計台の周りには建物が少なく、夜が深まれば深まる程、人気は無くなり、昼間とは正反対にどこか薄気味悪い空気すら漂い出してしまうのも、夜な夜な時計台に誰も近づかない要因だろう。

しかし少女にとってみれば、この薄気味悪い空気ですら心地良さを感じてしまう。

なにより、この静か過ぎる程の静寂が少女は好きだった。

この町、名前は『クワイアット』と言う。

規模的には中々の広大さを誇るが、特に何かが盛んな訳でもなく、一言で言う印象は『平穏』と言った感じだろう。

近くに鉱山があるが、それ程大きな鉱山では無い為、採掘出来る鉱石も少量で、町の財政を少しばかり潤してくれる程度だ。

と、こんな事を言うと寂れた感は否めないが、外からクワイアットを訪れる人はそれなりに多かった。

まずこの地方独特の穏やかな気候。

季節による多少の気温の高低差はあるが、この地方は一年を通して過ごしやすい気候に恵まれていた。

そしてこの町、クワイアットの平穏さ。

それなりの規模があり、人口も多い方であるにも関わらず、特に大きな事件は無く、平和な毎日が続いている。  
そのせいか、休養目的でクワイアットに訪れる人は多かった。

このクワイアットの穏やかな空気も少女は好きだった。  
が、クワイアットに少女が訪れて三日、この町で見れるものは大体見た。

「明日にでもこの町を出ようかな……」

少女の目的、それはこの『世界』を見る事だった。

それは『彼』が遺した『想い』でもあった。

『彼』の言葉の通り、少女は様々な世の中を見て歩いた。

世界を見る。

それとはまた別の『目的』を胸に秘めながら。

「おい」

不意にかけられた声にハツとなる少女。

展望台に設けられている小さな椅子の上で少しばかり夢心地になっていた少女は急に聞こえたその声によって我に帰った。

少女が俯いていた顔を上げると、一人の青年が訝しげに少女の顔を覗き込んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0114d/>

---

緋色の雫

2010年10月29日01時44分発行